

和田 静子（わだ・しずこ）

1、プロフィール

昭和6年にアララギに入会。21年5月、弘前市桔梗野に赤城文治を訪問し弘前アララギ会を結成。赤城らと弘前アララギ会の指導者として活躍した。

<生没>

1907(明治40)年8月15日 ~ 1977(昭和52)年12月7日

<代表作>

遺歌集『夏水仙』

<青森との関わり>

昭和10年、夫・和田義信の弘前市立病院副院長の赴任を契機として、一家は同市馬屋町に転居。以後弘前で歌人として活躍する。

2、作家解説

明治40年8月15日佐賀市、臼井家の次女として誕生した静子は、昭和3年茨城県出身の和田義信と結婚。6年夫とともに鶴岡市に転住することになり、この年アララギ入会、作歌を志す。また10年には夫の弘前市立病院副院長の赴任を契機として、一家は弘前市馬屋町に転居。21年、赤城文治を弘前市桔梗野の宅に訪ね、弘前アララギ会を結成する。仙台において東北アララギ会の「群山」が発刊、参加する。23年、土屋文明を迎えた弘前アララギ歌会に出席、坂本文雄と十和田湖に随行。24年、結城哀草果の「山塊」に入会。26年、長女賀寿子と斎藤茂吉を東京の自宅に訪問。同年10月、結城哀草果来県、和田家の離れに一泊、即詠の一首をひばの鶉木に揮毫した。

「朝山のあひよ黒雲のわきのぼり天奈留雲と交はるがみゆ 哀草果」

31年、赤城文治亡きあと、静子が弘前アララギ会の中心となり、以来月例歌会は殆ど自宅離れの茶室で開かれる。

「ささやかに今夜はじむる萬葉会師の亡き今の拠りどころとも」「拾ひ得し鹿子石一つに昂りて語らふ夫よ老いて若しも」

33 年、高尾山のアララギ安居会に初参加。以後、東京夏期歌会を含めて毎年参加。

「庭土に日の射してうかぶくれなみは箒目立ちし上の楓の花」

41 年5月、弘前野鳥の会に入会。「…たいてい少し遅く来られて列の後にいつの間にか付いておられるという具合でした。ひっそりと探鳥なされては短歌のひらめきを野鳥に求めている…小さなノートにメモをとる…こうして一周を終えられ、静かにお帰りになる、目立たないことが印象的なお方でした。」と佐藤清一は野鳥の会会誌に書いている。

「茎折れて蓮枯れそめし濠水に還りおくれし鷗一羽居り」

52 年 12 月 7 日永眠。享年 70。12 月 10 日弘前市元寺町日本キリスト教団弘前教会において葬儀を行う。「青森アララギ」は 192 輯を追悼号として発行。遺詠一首。「我が病長びけば夫のひとり住む庭のくるみに栗鼠来るといふ」

3、資料紹介

○遺歌集『夏水仙』

図書

1978(昭和 53)年 12 月 7 日

180 mm × 125 mm

昭和6年から52年までの作歌を中心に、702首の短歌が収められている。著者の一周忌にちなみ加藤貞次郎、小川良野等が編集に協力して昭和53年12月、夫和田義信が発刊した。生前自筆の表題の歌集の扉には「我ら天国に行く為に働く、主のみ顔を仰ぐ日まで」と著者の処生訓が掲げられている。